

『金剛手灌頂タントラ』の曼荼羅について

研究生 駒井 信勝

『金剛手灌頂タントラ』は、現在梵本も漢訳も確認されておらず、蔵訳のみが伝わっている經典である。日本においてこの經典が注目を集めたのは、酒井氏によって『大日経』の先駆經典と位置づけられたことによる。その後の研究により、本経が『大日経』のみならず『初会金剛頂経』にも影響を及ぼしたことが指摘されている。すなわち、日本で言うところの中期密教經典の成立過程を考える上で、決して無視することの出来ない經典なのである。本発表では、この『金剛手灌頂タントラ』に説かれる曼荼羅の中尊を考察し、その曼荼羅の意義について考えてみた。

『金剛手灌頂タントラ』には、『大日経』「具縁品」に相当する、七日作壇法によって曼荼羅を建立し、その曼荼羅を用いて行う灌頂儀礼が説かれている。その曼荼羅は三重構造で、内院に八葉が画かれ、四方に宝幢（東）・開敷華王（南）・無量光（西）・阿閼（北）の四仏、四維に過去七仏より毘婆尸（東南）・毘舍浮（西南）・拘留孫（西北）・尸棄（東北）の四仏、中心に転輪者が配される。二重には、文殊（東）・金剛手（南）・虚空蔵（西）・觀音（北）・普賢（東南）・除一切蓋障（西南）・弥勒（西北）・地藏（東北）の八大菩薩、最外院には一周に渡り護方天をはじめとした諸天を配置している。このように、尊格には名称が説かれ、

再構築することが可能だが、中尊のみ名称が説かれない。従来先行研究においては、この經典が『大日経』の先駆經典であるという点、および転輪者が画かれるという点から、曼荼羅の中尊は大日如来であると推定されてきた。

しかし、『金剛手灌頂タントラ』の曼荼羅の中尊は、『大日経』「秘密曼荼羅品」の記述とかなり近い内容を持っており、その記述との比較から、金剛手菩薩であるということが出来る。そして、『金剛手灌頂タントラ』で画かれる転輪は、金剛法を説く世尊金剛手菩薩を表わすものである。世尊金剛手は、金剛法を行う者として、十地の菩薩以外の集會者を降伏するのである。降伏された者達は、順次自身の心真言を世尊金剛手に捧げて、金剛法の教えに入っていく。初期密教から『大日経』に至までの三部を基調とした曼荼羅は、東方に仏部、北方に蓮華部、南方に金剛部を配するものであった。しかし、『金剛手灌頂タントラ』の曼荼羅はこの法則を全く無視している。これに関して、上記の事を踏まえて改めてこの曼荼羅の配置を考えると、中尊は降伏を行う世尊金剛手、八葉には一切如来としての四方四仏と過去七仏、二重には十地の菩薩としての八大菩薩、最外院には降伏され金剛法に入る諸天たちと言えるであろう。